

画材屋『あまやどり』

永

—あなただけの色、つくります。

ここはよく晴れることで有名なとある街。この街には知る人ぞ知るふしぎな画材屋さんがあります。店の名前は『あまやどり』。クリーム色の漆喰の壁にキツネ色の木の扉。たまごのような形の窓。スクランブルエッグのように鮮やかな黄色い屋根の上には一本の変変わった形をした風見鶏。

これは画材屋『あまやどり』の店主と画材屋を訪れる人たちの色々なお話。

【なくしたものの色】

突然、絵が描けなくなつた。

僕は小さいころから絵を描くことが好きだった。絵の学校へ通って技術を磨き、ありがたいことに絵を描いて売って、そのお金でご飯を食べられるようになった。要するに画家だ。僕は画家が生み出す作品は鑑賞すること、心で心を豊かにすることはできるけど、必ずしも生活に必要かって言われると、そうでもない。無くても生きていける所詮娯楽の一つである。さらに、人それぞれの趣味嗜好や価値観によって売れる絵もあれば売れな



い絵もある。今は生活する上で不自由がなくなっていくくらいのお金がもらえているけど、いつの日か突然生活できなくなるかもしれない。そんな不安定な仕事だ。でも、絵を描くことがとにかく大好きな僕はこれご時世に好きなことを仕事にできたことが誇らしく幸せだった。

僕には唯一無二の仕事の相棒がいる。小さい頃から可愛がっているペットの猫だ。シルバーグレーの毛並みに蜂蜜のような濃く艶やかな目をした雑種の雄猫。クレヨンを握りしめて初めて描いたぐしゃぐしゃの絵も、小学校の頃に賞を取った夏休み課題の絵も、卒業制作も、仕事として売るために描くようになった絵も全ての絵のモデルとして起用し、彼のたくさんの表情や仕草を描き続けてきた。

しかし、ある日突然、彼は僕の目の前から姿を消した。外に遊びに行った彼が一日中家にいないことはよくあったが、夜になっても住処である家に帰って来ないことは初めてだった。時計の針が二本とも真上を過ぎても帰って来ないことにいてもたってもいられなくなった僕は、近所から隣町まで一晩中探し続けたが、結局彼を見つけることはできなかった。日が昇る頃、沈むような気持ちと重い足取りで家に帰った僕が見たものは専用の寝床で息絶えていた彼の姿だった。「猫は死ぬ瞬間を見せない。」とはよくいったものである。

おそらく彼は、玄関扉に備え付けられた専用の入口からいつも通り帰ってきて、そのまま寝床で息を引き取ったのだろう。僕が出て行ってからどのくらい経って帰って来たのかはわからないが、いつも温かかった彼の身体は熱はとくに失われていた。僕が出ていくことがわかっていたのか、独りで逝くのはさみしくなかったか、どうして最期に会ってくれなかったのか、「悲しい」よりも「どうして」の気持ちでいっぱいだった僕は、しばらくの間ぼうぜんと立ち尽くしていた。

彼が亡くなってからも僕は絵を描くことをやめなかった。花、景色、動物、人、彼以外の猫、生まれて初めて色々なモチーフの絵を描いた。幸いなことにどの絵も売れた。「花の絵も素敵ね。」「君が彼以外を描くなんてめずらしい。でも君の他の絵が見れて嬉しいよ。」新しいモチーフを描き始めたことで新鮮さが魅力として評価された。僕は彼を失う前となにも変わらない生活を送った。ただ、彼がそばに居ないこと以外はなにも変

わらなかった。

でも変化は少しずつ表れた。だって何も変わらないはずがない。僕の絵は必ずと言っていいほど彼とともにあったのだから。

いや、彼ありきといった方が正しいか。彼を失った悲しみは遅れてやってきて、だんだんと僕の画業をむしばんでいった。

最初はどんな絵を描こうか思いつかなくなった。それならばと写生をした。見たままをひたすら忠実に描いた。次は思った通りの色がつくれなくなった。満足いかないままの色を使った。最後は手が震えて、鉛筆も筆も持てなくなった。筆を手にしぼりつけて無理やり手を動かした。そうしてできた絵は、まるで今の僕の心を写したようなもやもやでぐちゃぐちゃで写生のはずなのに何をどう見てどう写したのか自分でもわからない抽象画のような出来栄えだった。とても言葉にできないようなひどい絵だった。

僕は完全に絵を描くことができなくなった。

よく絵を買ってくれるお客さんのすずめで、僕は少しの間旅に出ることにした。思えば物心ついてから初めて絵を描くことから遠ざかった気がする。太陽の光が燦々と降り注ぐ晴れた街にやって来たのは景色が素晴らしい、とうわさに聞いたからだ。うわさ通り、降り注ぐ暖かな日差しの中で見ることができた自然や街並みは美しく、さらにそこに暮らす人々の活気の良さも相まって、なんだか元氣になれるような魅力的な雰囲気を持った街だった。食べ物、花、雑貨、たくさんのものを売っているお店が立ち並ぶ商店街の端っこにその店はあった。

屋根も壁も黄色で彩られた、まるでこの町を照らす太陽の光でできた柔らかな陽だまりの中にいるような色彩の一軒家。屋根の上には少し変わったシルエットの風見鶏。どうやら、普通の風見鶏とは異なるデザインをしているようだ。目をこらして見ると、鉄でできたニワトリはその両翼で一本の開かれた傘を持っている。ただ、その傘の持ち方が少しおかしかった。片翼は柄を、もう片翼は先に近い部分を持ち、ほぼ真上に向けられていた。この形、どこかで：「あっ、弓……！」そう、まるで矢を番えた弓を持っているかのような変わった傘



の持ち方をしている。見据える先にあるもの、まるで空高く輝く太陽を打ち貫かんとしているようだった。

何の店かよくわからなかったものの、なんとなく興味を惹かれた僕は店に入ってみることにした。扉の上には、店の名前だろう『あまやどり』と書かれた看板があった。扉には小さな板がかかっている。「なににな…

『あなただけの色、つくります。』？」頭にハテナを浮かべながらも、扉を開けた僕の目に飛び込んできたのは、たくさんのお色だった。天井まである高さの棚に並べられたカラフルな粉の入った透明な薬品ビン。黄色、赤、青、緑、紫、白、黒、ピンク、金や銀、この世界にあふれる色を全部集めましたと言わんばかりの豊かな色彩たちが薬品ビンに閉じ込められた状態で並んでいる。

壁一面に広がる圧巻の光景に言葉を失っていると「いらっしやいませ。」と遠くから声をかけられた。声の方に目をやると、奥の方に店員と思わしき人物がいた。膝の下くらいまである長いエプロンを身に付けている。どうやらほかの客と話している最中のようなだった。店員と話していた人物は僕が来たことに気づいて、店員に一言二言声をかけた後、こちらに向かって来た。「ありがとうハレマさん！ また来てね！」天然パーマだろうか、ふわふわの髪にはがらかな笑みをうかべたハレマと呼ばれた人物は、僕に向けた来店のあいさつとは比べ物にならないほど弾んだ店員の声を背に受けながら、片手を軽く上げて返事をし、店を出て行った。

「さて。」仕切り直しを図るかのような店員の声に向き直る。最初に聞いた来店のあいさつと同じ、落ち着いたトーンの声だ。

「扉の看板は見ていただけましたか？」

「『あなただけの色、つくります。』ってやつだね？ 見ました。意味はよく分かってないけど…。」

「それは今からご説明いたします。まずは改めて、画材屋『あまやどり』へご来店いただきありがとうございます。ここは見ての通り、日本画、油絵の絵の具をはじめとしたあらゆる画材を売っている画材屋。私は店長の『アマヤ』と申します。」

「画材屋…。」

改めて店内を見渡すと、筆にチューブ絵の具、キャンバスや和紙を張る木枠やパネル、イーゼル、スケッチブック、パレットや皿、木炭や鉛筆など、たくさん画材が所せましと並んでいる。壁一面のカラフルな粉入り薬品ビンの衝撃が強く、そちらにばかり意識が持っていかれてしまっていたが、確かに壁以外の店全体の様子は自分も行きなれた画材店と似ていた。そして、店長の話と店内のラインナップからして壁一面の薬品ビンに入った粉はおそらく日本画の顔料だろうということがわかった。

「画材屋さんだったんですね。壁一面の顔料にばかり目がいつちゃって店長さんに言われるまで気づかなかったな。」

「おや、岩絵の具をご存知で？ 絵を描かれていますか？」

その問いにどう答えるべきか少し考えたものの「日本画ではないけど、油絵を少し。」と濁して答える。

「そうでしたか。ではそんなあなたにぴったりの絵の具をご紹介します。こちらへ。」

「僕にか…。」

正直、絵が描けない今の僕にはどんなに美しく質の良い絵の具があっても宝の持ち腐れでしかないと感じたが、そんなことを見ず知らずの人に言っても仕方がない。おとなしく顔料の並ぶ壁の方に進む店長さんの後に続いていった。案内された先、入口からは見えなかった店内の一角は工房といった表現がぴったりの空間だった。電子測りや天秤測り、数個の空の薬品ビンや薬さじが乗った作業台と大きな機械が並ぶ空間を背に店長は意気揚々と紹介を始めた。

「この店では色々な画材を取りそろえています、なんといっても私の一番のおすすめは『あなたの絵の具』です。旅先で見つけた花畑。路地裏で見つけた陽だまり。なんでもない日に見上げた空。友人とけんかした日に流した涙。仲直りした時に一緒に飲んだミルクティー。恋人と歩いた木漏れ日の道。見つめあった時にのぞきこんだ、愛する人の瞳の奥。ご自身が見た景色や光景の色はもちろん、片想いの色、両想いの色、嬉しい、楽しい、それに…」



勢いよくまくし立てていた店長さんがそこで一度言葉を区切る。

「悲しい、さみしい、喪失。」

まるで自分の気持ちを見透かされたかのように続けられた言葉にどきっとした。

「：などなどご自身の中で生まれた想いや感情も色として目に見える形でおつくりいたします。つくるために必要なのはお代と、あなた自身の記憶や感情。さあ、あなたの欲しい、＼あなたの色＼はどんな色ですか？」

「僕の、欲しい色：」

「もしくは今のあなたに必要な色、でもかまいませんよ。」

「っ：わかりません。」

やっとの思いで絞り出した言葉は情けなくふるえていた。

「もう一度絵を描きたい、あの子の絵を描きたい。でもあの子はもういない、戻ってこない！ 今の僕には絵が描けないんですっ：！ どうやって描いたらいいのかも、何を描けばいいのかさえわからないのに、必要な色なんてわかるはずがない：！」

力の限り叫んだ。ぜえはあと肩で息をする。彼を失って以来腹の底にくすぶっていた得体の知れない感情をようやく少しだけ吐き出せた気がした。

「ふむ、私にはわかりましたよ。」

「え：？」

僕の八つ当たりじみた理不尽な怒号などどこ吹く風で淡々と自分のペースを崩さずに言葉が続ける店長さんに、自然と力が抜けていく。

「あなたに必要な色はきつと『なくしたもの』の色です。」

「『なくしたもの』の色？」

「ええ、実際にやった方が早いです。さっそくつくってみましょう。」

そうやって店長さんはぐいぐいと僕の背中を押して作業台の横にあった椅子に座らせた。「目を閉じて、そして強く想ってください。今はないもの、でもつい最近まで当り前のようにそばにあった大切なもの。なくしたことがばかり考えないで、ともにあった時の思い出、なくしてしまったものへの思い、強く強く想い描いてください。」

店長さんの言葉にしたがって、ひたすら彼のことを想った。部屋の照明に反射して鈍く輝くシルバーグレーの毛並み、まっすぐに僕を見つめる蜂蜜色の瞳、キャンバスに向かう僕を認識すると、尻尾だけをゆらりゆらりとゆらめかせてその場でじっとしてくれていたっけ。クレヨンを握りしめて、力いっぱいにぐちゃぐちゃの線と色で描いていた頃からの付き合いだったんだし、もしかしたら自分をモデルに描いていることがわかっていたのかもしれないな。…そういうえば、彼が亡くなってからというもの、彼のことを考えたり、思い出したることがほとんどなかった。

理由はただ一つ。想えば想うほど悲しくなってしまうと思ったからだ。

「目を開けてください。」

店長さんの声に導かれるように目を開ける。なぜか僕の胸の前に店長さんの手がかざされていた。一体何が起くるのかとふしぎに思っていると、次の瞬間、僕の胸の奥から光の粒子が現れ、店長さんのかざした手の平に向かって集まった。集めた光の粒子を手の平で包み込み拳の中に閉じ込めると、拳の中のを空の薬品ビンの中に入れる。光の粒子だったそれは、みるみるうちに色付いていった。「できましたよ。」今しがた目の前で見た非現実的な光景に固まる僕に店長さんは先ほど僕の胸の中から取り出したものを見せてくれた。ビンを受け取ってのぞきこむ。中には、とろりとした蜂蜜のような濃い黄色がところどころ混ざった、アイスグレーの粉が入っていた。僕の間からは自然と涙があふれていた。

一度あふれた涙は止まるどころかますます勢いを増し、次から次へとこぼれ落ちていく。嗚咽をあげ恥も外聞もなくただただ泣きじゃくった。

「これがあなたのなくしたもののいろ。なくなってしまったけれど、忘れてはいけない大切な想いの色です。」



思えば、僕は彼をなくしてからというものの涙を流したことがなかった。悲しいだとかさみしいを感じる前に彼がいなくなったという事実ばかりが胸に突き刺さり知らず知らずのうちにぼっかりと大きな穴になってしまっていたのかもしれない。泣くこともできず、さみしがることでもできず絵を描くことで埋めているつもりになっていたのに、心の穴はぼっかり空いたまままで全然埋まっていなかったのだ。なくしたものの大きさに打ちひしがれる前に僕の心は勝手になくしたものの未練をかくしてしまっていたのではないか。一種の防衛本能だったのかもしれない。

身体中の水分が出て行ってしまうかと思うほどひとしきり泣きじゃくり、ようやく落ち着いた僕にどこからともなく現れた初めて見る店員さんが温かいお茶と蒸しタオルを渡してくれた。

「ありがと、クモユキさん。」

店長さんにクモユキさんと呼ばれた人物は僕に向かってぺこりと軽く頭を下げると、すぐに店内のどこかへと行ってしまった。

「あなたのように突然の別れによってなくしてしまうもの、ほかにも無意識の内に、毎日のいそがしさの中で、子供から大人へ成長する中で、忘れてしまっただけでそのままなくしてしまうものはたくさんあるんですよ。」

そう言って店長さんとはある棚の一角に目をやった。

そこにはこれまた色々な色が入った薬品ビンが並んでいる。

「もしかして、あれが店長さんのなくしたものですか？」

「ええ。」

そう言って、棚から二つの瓶を取り出す。

「これは昔、私の後ろを一生懸命ついてくるのが可愛かったヒヨコを、こちらは草むら無邪気なかけ回るのが好きだったニワトリを想いながらつくりました。」

少し口元をゆるめながら見せてくれた二つのビン。ヒヨコのほうは雛特有のふわふわとした羽毛を思わせる

クリーム色とそれよりも濃い黄色が少し混じったまるでこの店の外観を思わせる色をしている。ニワトリの方は羽毛の色と思われる薄いキャメル色と深緑、黄緑、オリブ色などただの「緑色」でひとくくりにするにはもったいないほど多くの複雑な色が混ざり合っているようだった。どちらもおしみなない愛情を注いでいたことがよく伝わってくるほど、強い慈愛の想いがこめられた色だ。

「忘れてしまってからでは色に残せないこともあるので、覚えているうちに大切に、大切に保管することになっているんです。」

棚の一角にはまだまだたくさんさんの色が並んでいる。おそらく店長さんも色々なものをなくしてきたのだろう。もしかしたら僕にも思い出せないだけで、もっともっとたくさんさんのなくしてきたものがあるのかもしれない。

僕の想いから生まれた僕だけの色。店長さんがせっかくならばと僕が使いやすいように油絵の具に加工してくれた。いわく「実際に使ってもらうことで絵の具としての価値を発揮するから。」だそうだ。絵の具を入れた紙袋には店の屋根にいた例の変変わった形の風見鶏が描かれていた。この店のロゴ兼シンボルなのかもしれない。可愛いですね、と感想を述べたところ、あのニワトリは太陽に恋をしているのだと教えてくれた。無謀にも、けれども必死に、傘で太陽のハートを打ち貫かんとしているとも。

この店に来たばかりの時には真っ白なキャンバスの前に立つことを想像するだけで恐怖心を抱くほど絵と向き合うのが怖かった。だけど、今は早く描きたい！ この絵の具を使って彼をまたこの手で描きたい！ とはやる気持ちでいっぱいだ。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしています。」

「また必ず来ます。今度は描いた絵を持って。」

「それは嬉しいですね。当店にはギャラリースペースもあるのでよろしければ個展会場としてもご利用ください。」

店長さんの指し示す方を見ると、十畳ほどの白い壁と白い床におおわれた展示スペースがあった。

「あははっ！ 個展をやるならたくさん描かないと。」



「応援させていただきます。」

ドアを開けると、抜けるように青い空と燦々とした日差し：ではなく、オレンジ色の夕日が街全体を染めていた。扉の前で見送りをしてくれる店長さんに会釈をし、商店街へ足をふみ出そうとしたとき、ふと唐突に気になって興味本位で聞いてみた。

「そういえば、店長さんは絵を描かないんですか？」

あんなにたくさん種類の色をつくり、画材店まで営んでいるのだから絵の心得があるのではないかと純粹に思っていたことだった。だから、質問に対して目を見開いた後、恥ずかしそうな、悔しそうな何ともいえない複雑な表情を浮かべた店長さんに少し驚いた。

「私は：絵を描くことが苦手なんです。でも絵を描くお手伝いをするのは好きなんですよ。だからこうして画材屋を営んでいるし、私の力でその人にしか生み出せない色をつくり出して、その絵の具を使ってその人にか描けない絵を描いていただけののなら、それより嬉しいことはないんです。」

夕日に照らされた店長さんの顔ににじんできたのは、その言葉に嘘偽りない喜色と少しの切ない色だ。もしかして無神経なことを聞いてしまったのだろうか？

「僕、店長さんの絵を見てみたい。目には見えない人の想いや記憶を目に見える形にすることができる店長さんのふしぎな力。その力はきっと人の想いに寄りそえる優しいあなただからこそ発揮できるんだと思います。そんなあなたなら、きっと、魅力的な作品ができますよ。」

少し気まぐしくなった空気に居てもたってもいられず、思わずきざったらしい言葉が口をついて出てしまった。おそろおそろ店長さんの反応をうかがう。店長さんは「ありがとう：ございます。」と言葉につまりながらうつむきがちに感謝の言葉を述べた。僕は言葉が達者な方ではないけれど、どうか嘘偽りのないこの気持ちで店長さんに届いていたらいいなと願った。

「あなたのあの棚に並んでる色、なくしたもののだけじゃなくて、『なくそうとしたもの』もあるよね。」
お客さんを見送って店内に戻るとクモユキさんが話しかけてきた。

「…聞いてたの？」

「聞こえたの。」

がつり聞かれていたとは知らなかったから、少しバツが悪くて冷たく返してしまう。しかし、クモユキさんは気にした風もなくいつも同じ軽い調子で返してきた。クモユキさんの言う通り、あの棚にはずっと抱え続けるのが苦しくて、痛くて、なくしてしまいたかったり、捨ててしまいたかった想いがいくつも並んでいる。そのすべてが所詮『恋心』というやつだ。しかもすべて同じ人への。色にして昇華させたつもりでいても、保管したそばからまた新たに次々わき上がってくるからきりが無い。結局捨てられないのと同じようなもの。色にして残してしまった分、むしろ際限なく物理的に増え続けている。

「それにあなた絵、描くでしょ。いつも同じ絵。」

そう言ってクモユキさんが持ってきたのは太陽を見上げるニワトリの絵と、それから：ハレマさんの絵。どちらともまぎれもなく私が描いた絵。遠くからながめたり、横からぬすみ見たり、上から見下ろしたり、下からあおぎ見たり、無表情、少しむっとした表情、真剣な表情、一番好きなのは何と言っても太陽のようなまぶしい笑顔。

「今に始まったことではないけど、ただの画材の卸売屋にのめりこみすぎじゃない？」

「好きなんだよ。」

「あの人のことどれくらい知ってるの？」

「名前と仕事くらいしか知らない。」

「何も知らないのと変わらないよそれ。」

「でも好き。」



「……」

「……この絵のニワトリ、いつ太陽に近づけるんだらうね。」

それ以上、クモユキさんは何も言わなかった。

だって仕方ないじゃないか。捨てようとしても、忘れようとしても次々とまとう色を変えてはよみがえってくるのだから。理解不能な私の恋は今日も新しい色を生み出し続けている。

【きれいじゃなくても恋の色】

はやる気持ちをおさえきれず、力任せに扉を開ける。壁に強く打ち付けられた木の扉はいやな音を立てた。

「いらっしゃ……」

「あなたが恋愛成就の絵の具をつくれるってやつ!？」

長いエプロンをつけた店員と思わしき人物に詰め寄る。

「恋愛成就、ですか？」

「うわさで聞いたの!」

「当店でおつくりできるのは『あなたの絵の具』というもので、あなたの想いや記憶を抽出して色という形で……」

「ごちゃごちゃと面倒くさいわね! いいから早くつくりなさいよ!」

話をさえぎるようにまくし立てると、店員はそのまま引き下がった。そしてそのまま「こちらへ。」と店の奥に案内される。案内された先にあったのは、でかい機械と理科室にありそうな道具が乱雑に置かれた大きな机。そこに向かって座るよう言われた。

「最初に言っておきますが、あなたの想像通りの色がつくれるかはわかりません。すべてはあなたの想いと記憶次第です。」

「大丈夫だから早くつくって。」

「…では目を閉じて、強く想って、または思い描いてください。」

店員の言葉にしたがって意識を集中させる。彼への想いも彼との大切な記憶も私以上に鮮明に思い描ける人なんていないの。私の恋はどんなに素敵な色なのかしら。ああ、楽しみね。

「っどうして…!？」

「どうして、と言われましても…。」

一緒に食べたナポリタン、一緒に見た海、初めて出会ったカフェテラスでその時に飲んだクリームソーダ、思い出の色はこんなにいっぱい鮮明にできるのに、なんでなんでなんで！ どうして…!？」

「どうしていつまでたっても恋の色ができないのよ?!」

「できてますよ。」

「はぁ!? こんなに汚い色が私の恋なわけじゃないじゃない!」

店員が私の恋の色と言い張ったのは、黒とも茶色とも紫ともつかないたぐさんの色がごちゃごちゃに入り混じったお世辞にもきれいとは言えない色だった。しかも何度やっても、びみように色味が変わるくらいで濁っていることには変わらない。

「信じられないかもしれないかもしれませんが、すべてあなたの恋の色です。…失礼ですがあなた、片想いか、もしくは失恋しました?」

心臓がどくと大きく音を立てる。

「は…」

「まあ、必ずしも失恋…きれいじゃない色ってわけではありませんけどね。」

「…だったらならによ、悪い? そうだ! どんな色でもつくれるんでしょ? だったら私の恋が叶った場合の色、つくってよ!」



「つくれません。」

店員はすました顔で無常に告げる。

「愛されなかった悲しみの色はつくれます。叶わなかった恋の色はつくれます。あなたが経験したことだから。でも愛される夢の色はつくれません。私は未経験な色は作れません。私はあくまで色をつくり出すだけ、色を生み出すのはあなただから。あなたの中に生まれていないものはつくれないですよ。だからその色がどうしても欲しいというのならそれはあなた次第、ですね。」

「…だって、一緒に映画だって見たし、ご飯にも行った！ 何度も！ 何度も！ ……かわいいって！ 言ってくれたことだってあるのよ！ ……なのに、なんであんなやつと…！」

私の方が絶対に彼を好きなのに、彼はあいつを選んだ。受け入れたくない現実で揺るがない真実。だから、せめて自分の恋を、彼を想って幸せだった日々を目に見える形できれいなままで残したただけだった。それなのに、私の恋はいつの間にかいろいろな色が混じり合って醜くなってしまっていた。

「…私の恋の色、見ますか。」

胸の内を吐き出して、泣き崩れた私が少し落ち着きを取り戻した頃、店員は少しためらいがちに声をかけてきた。

「え…？」

「特別ですよ、こちらへ。」

そうして案内された店のバックヤードのような部屋には、店の壁一面に並んでいたものと同じ棚が床いっぱいを埋め尽くす程に立ち並んでいた。収納されているのはもちろん、色のついた粉が入ったビン。ただ…「なにこれ…」「これ全部私の恋の色なんですよ。」

「きれいな色なんてほとんどないじゃない。」

そう、店の壁一面にあったきれいな色たちとちがって、ここにある色は鈍かったり、濁っていたり、地味だったりとあまり見栄えの良くない色ばかりだった。

「そうですよ。色々な想いが混ざってできた色なのでね。」

「…ていうか、多くない？」

「新しい想いが生まれるたびにつくっていますから。」

少しもほめていないし、なんなら少し引いているのに店員はなぜか終始誇らしげだった。

「全部あなたの恋の色なのに、たくさん種類があるのね。」

「ええ、同じ恋の色は一つとしてないですから。楽しかったり幸せな気持ちだけで恋してませんよ。嫉妬したり、時には腹が立ったり醜い想いだってたくさん生まれます。恋人同士だったとしても2人の恋の色は全く同じわけではないですし、正反對なこともあるんですよ。」

「愛し合っているのに？」

「同じ人間が一人としていないように、同じ恋も愛も一つとして存在しません。だから同じ色も一つとしてありませんし、同じ色を見てきれいと思うも汚いと思うも人それぞれです。」

「そう…。ねえ、お願いがあるんだけど。」

「いかがでしたか？」

「あなたの店、絵をかざるところある？」

「ギャラリースペースですね、ございますよ。」

「展覧会をやりたいのよ。」

「あなたの？」

「ええ…なによ、絵なんて描いたことないけど別にいいでしょ！」

「何も申し出ておりませんが…どうして急に絵を描こうなんてお考えになったのですか？」

私の突然の申し出に店員は静かにおどろいた。それはそうよね、絵の知識なんてゼロの私が突然自分の絵の展覧会をやりたいなんて言い出したら。



「だって、とてもじゃないけど、きれいとは思えないあんな色なのに、なんだか愛おしそうに語るあんたを見てたら、私の恋の色も悪くないんじゃないかって少し思えたから。私の恋の色、せっかくつくったのに誰にも見てもらえないなんてもったいないじゃない!」

きっぱりと、今の率直な気持ちを告げた私を店員はぱくりとまばたきしながら見つめていた。そして、ふつと笑みをこぼして続ける。

「展覧会のタイトルはどうなさるんですか？」

「そうね…『私の恋模様展』てところかしら。」
「素敵です。」

「絵なんて初めて描いたけど、意外と楽しいわね!」

嵐のような来店から3週間後、彼女の人生初個展は無事幕を開けた。

「それはよかった、そういえばカラフルな記憶の色は使わなかったんですね。」

「あれは、私と彼だけの思い出の色なの。だから私が知っていれば十分。でも私の恋の色は私だけが生み出せる色だもの。今回見てほしいのはそれだから。」

「そういうものですか。」

「ええ! それにね、私の恋の色を見てきれいって思ってくれたり、何かを感じてくれる人がいたら、それって…運命、感じないかしら?」

「大変素敵なお考えかと。」

「あら、嫌味?」

―「わあ! すごくきれいな色!」

「そうかな? 濁った色にしか見えないけど、しいて言うならこの桃色の部分はきれいかも。」

「そこ以外もきれいだよ！」

「おや……」

「ほらほら！　ね！　ちょっと行ってくる！」

決してきれいなばかりではない自分の恋の色を絵にして、多くの人に見てもらうことで昇華する。潔い彼女はきっとこれから新しい恋を見つけて、一から生まれ変わった真新しい澄んだ恋の色を生み出すのだろう。

「早速いらっしゃったようですね。よいご歓談を。よろしければ紅茶をご用意いたしますよ。」

「ありがとうございます！」

無邪気に駆けていく可愛らしい後ろ姿を見送る。そうしてしばらくギャラリーにいらしたお客さまと話す彼女を見てみると、いつの間にかティーセットをもったクモユキさんとなりに来ていた。

「自分の恋の色をさらけ出せるなんてすごいね。」

「うん。」

「アマヤさんもどんな使えばいいのに。」

「……私は大切にしまっておく派なの。」

「まあ人それぞれだし、いいけどさ。」

そうつぶやいてギャラリーの方に行ってしまった。

「生まれていない色はつくれない……」彼女に向けた言葉をくりかえす。私には、ずっとつくりたくて、でもつくれない理想の色がある。あの人に愛される色、あの人との恋の色。

いつかできる日が来るのかな。

ここは人々の想いや記憶から世界に一つだけの『あなたの絵の具』をつくることができるふしぎな画材屋『あまやどり』。毎日のように新しい色が生まれる場所。店長のアマヤさんは今日も恋の色研究中です。